

## 【特別寄稿】 中国における加藤周一思想の受容

—— その翻訳及び研究 ——

顧 春<sup>(1)</sup>

加藤周一（1919-2008）は戦後日本の最も重要な思想家、評論家、作家の一人で、中国の学界においても名高い日本人学者である。その西洋文化と日本の伝統文化の思想転換点における代表作である「日本文化の雑種性」（1955）が楊鉄嬰より中国語に翻訳され、1991年に出版されて以来、加藤の代表的な作品が次々と中国語に翻訳・紹介されてきた。葉謂渠と唐月梅は、加藤著作の翻訳と普及に他の追隨を許さない存在である。

1995年に葉謂渠と唐月梅が『日本文学史序説』（外語教学与研究出版社）を翻訳し、2011年に再版された。2000年、葉謂渠らが「日本文化の雑種性」と「日本近代モデル論」を中心とする作品を『日本文化論』と題して翻訳し、光明日報出版社より出版した。その後、『世界漫遊記』（王建新、河北教育出版、2002年）、『日本人とは何か』（彭曦、鄔曉研、南京大学出版社、2008年；李友敏、新星出版社、2018年、訳本の題名は『日本人的皮囊』）、『日本文化における時間と空間』（彭曦、南京大学出版社、2010年）、中国関連のエッセイ集の『21世紀と中国文化』（彭佳紅、中華書店、2007年）、『日本美術の心とかたち』（許秋寒、外語教学与研究出版社、2013年）、『羊の歌——わが回想』（翁家慧、北京出版社、2019年）が、次から次へと翻訳・発行された。

著作の翻訳が相次いで出されるのに対して、加藤周一に関する研究は、中国においてまだ不十分である。1980年代改革開放以来、加藤周一の学問が学界に知られるようになり、それをめぐる研究は主に雑種文化論及

び文学通史論に、焦点が当てられている。2019年、フィクション的な自伝『羊の歌——わが回想』の翻訳版が誕生して以来、加藤思想及び精神に関する論文も見られるようになる。

中国のデータベース CNKI を調べる限り、加藤周一に関する最初の研究記録は、1987年12月、吉林大学日本学研究所で行われた、大学内の「加藤周一における日本文学の特質について」の研究会であった。この研究会において、加藤の研究方法が、フランスのイボリート・テーヌの『芸術哲学』の影響を受けたと考えられ、加藤の日本文学の特徴における「歴史的な発展形態」「言語と文字の表現」「世界観という根底から」への関心が継承された。

加藤の「雑種文化論」をめぐる最初の論議は、劉迪による「加藤周一の雑種文化理論を論ず」（1988）である。この論文において、日本文化の特徴である「雑種性」は何か、雑種文化の形成メカニズムが述べられ、日本の近代化には民主主義、技術文明、伝統という3つが欠けてはいけないということから、雑種論は一種の普遍的な意味を持つアクティブな理論であると指摘された。

1990年代に加藤に関する論文が5つあり、そのうち諸葛蔚東の「加藤周一という人、文章、学説」と葉謂渠の「加藤周一の目」はどちらも加藤に関する総合的評価である。また、許金龍の「日本人作家加藤周一」では、加藤を紹介した上で、『加藤周一著作集』に収録され中国語に翻訳された短歌14首を林林が発表した。他の2つの文は、魏大海の「加藤周一の日本文化の『雑種性』を論ず」と林林の『日本文学史研究の新体系——加藤周一の著作「日本文学史序説」』で、それぞれ雑種文化と日本文学史の見方について展開した。後者は、文化構造の全体において、日本文学を思想史的、哲学史的、文学史的に把握することを高く評価している。

21世紀に入って、葉謂渠が2000年10月に加藤のお宅を訪問し、日本

の雑種文化と現代化の関係をめぐって対談を行った。対談を整理した文章では、葉謂渠が「衝突・共存・融合」が日本文化の外来文明に対する受容の仕方だと強調・評価し、新しいものを受け入れようとしないうことと西洋化への絶対主義・文化中心主義のいずれも近代化を達成できないと指摘した。

下崇道は「島国日本文化論への考察」を著し、加藤の「雑種文化論」と梅棹忠夫の「並行文化論」を比較する視点から、日本への郷土愛とアイデンティティを再構築する上で、雑種文化論の積極的な意義を評価した。同時に、「共生文化論」を提唱し、縦には日本文化の「共存・融合・共生」の道筋をたどり、横には「生活文化」という面において物事を理解し、自己の面において展開していくという特徴であると提示した。

また、王勇は『日本文化論——解析と再構築』で、雑種文化論も含め、それまでの重要な日本文化論を整理・解析した。他に雑種文化論をめぐる論説には顧長江、江蕾蕾が挙げられる。

雑種文化論と文学通史に対する見方以外、「詩学」（郭勇健、「加藤周一の三元比較詩学」）、「現世主義」（丁海婷、「日本現世主義——加藤周一の『日本文化における時間と空間』を読む」）、加藤の中国観（孫衍寧、「加藤周一の中国印象試論」）という視点の論説がある。前者では加藤の文化比較論における日本、西洋、中国をより広く比較する方法を「三元比較詩学」と名づけ、それは多様性の中で普遍性を見出す文化的な探りであると評価した。孫衍寧が加藤の中国紀行で書かれた「飛檐」を中心に加藤の中国観を絞り出したと言える。また『翻訳の思想』の解説文として書かれた「明治初期の翻訳」を中心に、加藤の翻訳観についての分析として林哲翔の「加藤周一の翻訳観初探」が挙げられる。この論文では、文化学立場に立った歴史、社会、また異文化交流の角度、文明発展と世界観の転換という時代のキーワードから日本近代における翻訳を見直した加藤の翻訳観が指摘され、アイデンティティの出発点とその翻訳観と文化観に一脈相通

ずるものである。

2019年『羊の歌——わが回想』の中国語版の発行につれ、加藤研究の視野が戦後日本知識人の思想軌跡、戦争問題に広げられた。孫歌が加藤の独自性と時代の主流思想と一線を画す立場を「局外人精神」と解釈し、「人生から始まる精神的な体験が、世界を再発見する最もよい入口となる」と肯定した。小熊英二著、郭穎訳の「沈黙する羊、歌う羊——戦後思想における加藤周一」では「希望－判断」と「価値判断－事実判断」の関係が、1954年以降の加藤思想の軸で、戦後日本思想において、独特な地位を占めていると指摘した。庄焰が『羊の歌』を個人化した方法で日本の戦後知識人の主体性を再構築した典型的な例と見なして、その政治的及びイデオロギー的構築力に期待している。

また、2022年11月、劉争の『「例外」の思想——戦後知識人・加藤周一の射程』の中国語版が発行され、これは中国における初めての加藤研究の専著となっている。この著作において、「本土世界観」と「例外の個体」の張力の中に加藤の孤高の思想における「特殊性」がいかに普遍性へとつながるかについて考察する一冊で、二つの緊張関係で加藤を戦後日本の思想系譜に位置づけることは、中国における加藤研究に新たな視野を切り開いた。

加藤の思想は、文化論、政治論、藝術論など多岐にわたって、個性（アイデンティティ）とグローバリズムのバランスの中で築かれた普遍性に向けた論説は特に反グローバル的潮流の現実社会に、傷を癒す多くの示唆を与えていると言えよう。それをめぐって研究がまだ十分に深く展開されていないのが現状で、中国の日本学学界には、注目と研究に値するものも多い。

## 註

- (1) 中国社会科学院文学博士、北京工業大学文法学部副教授。研究方向は中日近代思想交渉。訳著子安宣邦『漢字論』、論文「中国近代『民主』『民政』概念的生成」「『中本西末』乎？『政教為本』乎？——郭嵩焘的西方政治観」などがある。

(こしゅん 北京工業大学文法学部副教授)

## 【付】 文献リスト

- 加藤周一著、楊鉄嬰訳、『日本文化的雜種性』（『日本文化の雜種性』）吉林人民出版社，1991年
- 加藤周一著、葉謂渠等訳、『日本文化論』光明日報出版社，2000年
- 加藤周一著、王建新訳、『世界漫遊記』河北教育出版社，2002年
- 加藤周一著、彭佳紅訳、『21世紀与中国文化』（『21世紀と中国文化』）中華書局，2007年
- 加藤周一著、彭曦、鄔曉研訳、『何謂日本人』（『日本人とは何か』）南京大学出版社，2008年
- 加藤周一著、彭曦訳、『日本文化中的時間与空間』（『日本文化における時間と空間』）南京大学出版社，2010年
- 加藤周一著、葉謂渠、唐月梅訳、『日本文学史序説』外語教学与研究出版社，2011年
- 加藤周一著、許秋寒訳、『日本芸術の心与形』（『日本美術の心とたち』）外語教学与研究出版社，2013年
- 加藤周一著、李友敏訳、『日本人的皮囊』新星出版社，2018年
- 加藤周一著、翁家慧訳、『羊之歌——我的回想』（『羊の歌——わが回想』）北京出版社，2019年
- 劉争、『“例外”的個体——論加藤周一及其思想』（『“例外”の思想——戦後知識人・加藤周一の射程』）知識産権出版社，2023年
- 劉迪，「論加藤周一的雜種文化理論」（『加藤周一の雜種文化理論を論ず』）『日本問題』1988（05）
- 諸葛蔚東，「加藤周一——其人、其文、其学説」（『加藤周一という人、文章、学説』）『日本問題』1990（5）
- 魏大海，「加藤周一論日本文化的“雜種性”」（『加藤周一の日本文化の“雜種性”を論ず』）『外国文学動態』1994（04）
- 林林，「日本文学史研究の新体系——讀加藤周一著『日本文学史序説』」（『日本文学史研究の新体系——加藤周一の著作『日本文学史序説』』）『世界文学』1995（03）

- 葉謂渠,「加藤周一的眼睛」(「加藤周一の目」)『世界文学』1995 (05)
- 許金龍,「日本作家加藤周一專輯」(「日本人作家加藤周一」)『世界文学』1995 (05)
- 葉謂渠,「日本雜種文化与現代化——与加藤周一対談録」(「日本雜種文化と現代化——加藤周一との対談録」)『日本文学』2001 (01)
- 卞崇道,「關於島国日本文化論的思考」(「島国日本文化論への考察」)『浙江海洋学院学報』(人文科学版)2005 (04)
- 王勇「日本文化論——解析与重構」(「日本文化論——解析と再構築」)『日本文学』2007 (06)
- 林哲翔,「加藤周一的翻譯觀之初探——以『明治初期的翻譯』為中心」(「加藤周一の翻譯觀初探——『明治初期の翻譯』を中心に」)『青年文学家』2010 (01)
- 顧長江,「加藤周一“雜種文化論”浅析」(「加藤周一“雜種文化論”についての試論」)『文教資料』2010 (08)
- 孫衍寧,「試論加藤周一的中国印象——以“飛檐”為視点」(「加藤周一の中国印象の試論——“飛檐”を視点に」)『福建省外国語文学会2012年会論文集』2012
- 丁海婷,「淺談日本現世主義——讀加藤周一『日本文化中的時間与空間』有感」(「日本の現世主義についての試論——加藤周一の『日本文化における時間と空間』を読む」)『中外企業家』2016 (06)
- 江蕾蕾,「対日本“雜種文化”形成特点的分析」(「日本“雜種文化”の形成要因の分析」)『文学教育(下)』2021 (01)
- 庄焰,「戰爭時期日本知識分子的精神結構与戰爭認識——從加藤周一『羊之歌——我的回想』談起」(「戰爭時期における日本知識人の精神構造と戰爭認識——加藤周一の『羊の沈歌——わが回想』から」)『外国文学動態研究』2021 (06)
- 小熊英二著、郭穎訳,「沈黙之羊 高歌之羊——戦後思想史中的加藤周一」(「沈黙する羊、歌う羊——戦後思想における加藤周一」)『日語学習与研究』2022 (01)
- 郭勇健,「加藤周一的三元比較詩学」(「加藤周一の三元比較詩学」)『外国文学研究』2022, 44 (04)

